

## 天声人語

つい先日、富山市の「国文学館」で開催中の「官人伴家持」展を見た。来年、生誕1300年を迎える奈良時代の歌人の人物像を朝廷でのキャリアからたどるという意欲的な試みだ（6月5日まで）▼（春の園紅にほふ桃の花下照る道に出で立つをとめ）。万葉集を編纂したとされる家持の代表作である。とかく恋愛に忙しかったとか、左遷続きだったとかいう印象がある▼だが中西進館長（87）は「実態とかけ離れたわ虚像です」という。「文学にかまけたわけでは決してない。現実政治に生涯をかけて真正面から取り組んだ名門貴族でした」▼地方官として派遣された北陸や山陰では管内巡視に励んだ。司令官として赴いた東北でも蝦夷制圧という難しい任務に力を尽くしている。「一言でいえば円かな人。ヒューマニズムを重んじ、良心的でした。その分、台頭する藤原一族から圧迫されました」▼桓武天皇に対する謀反事件で関与を疑われ、京外へ追放される。復帰をはたしたが、家持の死後すぐに起きた重臣暗殺事件では首謀者にさる。田地を没収され、息子は隱岐へ流されてしまう▼（うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば）。ヒバリの舞う、うららかな春でさえ人は愁いを感じる。名高い秀作も、朝廷内で後ろ盾を失った苦難に思いをはせると、孤立を嘆いた政治の歌のように響く。勢に乗る藤原氏、衰えゆく大伴氏。いつの政治、どの組織とも変わらぬ盛衰のドラマがありありと浮かぶ。

2017・5・21